

# 特別活動カリキュラムの意義についての検討

－教育プログラムの視点を通じた  
特別活動カリキュラムの再構成－

森田 司郎\*

## A Study on the Significance of Extraclass Activities: Reconstruction of the Curriculum of Extraclass Activities with the Concept of Education Programs

Shiro MORITA\*

### Abstract

The purpose of this study is to make sure the significance of the Curriculum of Extraclass Activities (E.A.) in schools. In this article, the Curriculum of E. A. is seen as a set of "Education Programs." Education Program is a complete unit of learning activities. Education Programs have definite purpose, goals, process of learning, resources, and targets of learning. With having these definite elements, Education Programs are considered to produce certain level of effectiveness regardless of the difference of school settings. Three main elements of Education Programs are examined to apply to reconstruct the concept of Curriculum of E.A. The framework of (1) Needs assessment, (2) program effectiveness, and (3) program integrity are used to construct a new concept of Curriculum of E.A., This reconstruction of Curriculum concept warrants certain level of effectiveness of the activities in E.A., regardless of the difference of each school settings.

キーワード：特別活動、カリキュラム、教育プログラム

### 1. 問題の設定

本研究の目的は、特別活動を教育プログラムの総体として捉え直すことで、学習効果の再現性を備えた特別活動カリキュラムを構成するための要件を試論的に明らかにすること

である。

#### 特別活動の意義の見直し

現在、学校教育において特別活動の意義が問い直されている。学習指導要領の改訂にもなっており、理数科目を中心とした各教科の授業時数が増加した。いっぽうで、学校週五日

---

\* 情報コミュニケーション学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

制は保持されたままである。各学校では、各教科の授業時数をいかにして確保するかが重要な課題となっている。このような状況の中で、各学校では、特別活動に十分な時間を割くことが困難になっている。例えば、文化祭や体育祭、合唱祭などの各種行事に関する時間が短縮されたり、ホームルームの時間が他の目的に代用されたりと、特別活動の時間が削られる場合も珍しくない。

大学において筆者が担当する教職科目を履修している学生への簡略なアンケートの結果、多くの学生たちは「部活動」や「修学旅行」、そして「文化祭、体育祭」についてはその教育的な意義を認めているようである。しかし、ホームルームの時間に関してはその教育的意義を見出せない学生も一定数いた。学生たちは、最近まで小中高の学校教育を受けてきた者である。特別活動の意義に関する彼、彼女らの率直な意見は、特別活動が置かれている現状をある程度反映していると考えることができよう。学級づくりという特別活動の基盤を形成するはずの学級活動であるが、学生たちにとってはその意義が不明確であるようだ。今後、学校教育において特別活動を充実させていくなれば、特別活動の意義を明確に打ち出してその成果を明らかにしていくことが強く求められる。

ここで注目すべき問題は、修学旅行等の個々の活動による経験が積み重なって、特別活動の全体像を形成するという実感を、学生たちがもっていない点である。つまり、学生たちの経験の中には、特別活動の全体像が実体として把握されていないのである。学生たちにとっては、部活動、修学旅行や文化祭、体育祭での経験は、それぞれに分断された学習経験にすぎない。

これまで、特別活動の意義を明確にしようとする試みは、継続的になされてきた<sup>1)</sup>。しかし、それらの多くは特別活動の意義として「望ましい集団活動や自主、自律の態度を育

成する」ことを論ずるにとどまっている。このアプローチには、抽象的な議論にとどまり、実体的かつ具体的な議論にはつながらないという限界がある。

そこで本研究では、上述した修学旅行や文化祭、体育祭のような個々の活動を一つ一つ完結した学習活動として捉える。そして、これらの活動が結び付いた総体として特別活動カリキュラムが構成されると考える立場をとる。つまり、特別活動の意義を帰納的に明確化しようと試みる。特別活動における個々の学習活動をそれぞれ完結した単位として捉える視点として、本研究ではプログラム概念に注目する。

以上の問題意識に基づいて、本研究では以下の手続きによって検討を進める。

まず、プログラム概念を整理して、カリキュラムとプログラムの違いを検討する。次に、特別活動における個々の活動をプログラムとして捉え直す。そして、個々のプログラムを特別活動カリキュラムとして統合するために必要な視点を明らかにする。最後に、プログラム評価理論をてがかりに、学習効果の再現性を確保しうる特別活動カリキュラムを構成するための要件を試論的に明らかにする。

## 2. 特別活動における学習の特性

### 体験的ゆえの再現性の低さ

まず、ここでは、特別活動における学習の特性を検討し、特別活動の意義を明確にするために克服すべき課題を明らかにする。

周知の通り、特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団（や社会）の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の（人間としての）生き方についての考え（自覚）を深め、自己を生かす能力を養う」ことである（小学校学習指導要領、（ ）内

は中学校)。特別活動の主な教育的意義として、「集団（や社会）の一員として、なすことによって学ぶ活動を通して、自主的、実践的な態度を身に付ける活動である」点が挙げられている（『小学校学習指導要領解説 特別活動編』文部科学省 2008年、（ ）内は中学校）。

端的に述べれば、特別活動における学習の特性は「教師の適切な指導の下」で「集団による実践的な活動」を通して、子どもたちに豊かな人間性、社会性、そして自律性を身に付けさせることであるといえる。特別活動では「なすことによって学ぶ」、すなわち子どもの生活の中に課題を発見し、それらを子どもたちが自ら解決していくという体験的な学習方法がとられる。このように、特別活動では、子どもが体験している生活の中に生じする課題解決が目標となる。そして、子ども自身がその課題を解決する学習活動を体験する。このように、特別活動における学習は、学校教育における様々な学習の中でもとりわけ高度に体験的な特性をもつ。

子どもの生活の中から学習課題を設定し、「なすことによって学ぶ」学習プロセスを中心に据える特別活動での学習は高度に体験的である。それがゆえに、特別活動での学習には再現性が乏しいという特性もある。各教科における学習と比較した場合、特別活動のこの特性は理解しやすい。

例えば算数では、「円の面積及び角柱などの体積を求めることができるようにするとともに、速さについて理解し、求めることができるようにする」というように具体的な目標が設定される（『小学校学習指導要領第6学年算数』より）。そして、それに必要な思考や技能をA数と計算、B量と測定、C図形、及びD数量関係の事項に分けて指導することになっている。ここでは、具体的な達成目標が設定され、その達成に必要な思考や技能を積み上げていく構造で学習が進められ

る。当然、子どもたちの理解度には個人差がある。個人差には各教師がTAの活用等を含めた授業方法の工夫で対応することが求められる。そして、この基本的な学習の道筋は保持される。したがって、学習の目標が十分に達成された場合には、指導方法は適切だったことになる。この指導方法は、おおむね他の子どもに対しても適切であるものと考えることができる。つまり、その学習活動の再現性は一定程度保証されている。

いっぽうで、特別活動では各教科での学習とは異なり、比較的抽象的な学習目標（望ましい人間関係の形成や、自主的、実践的な態度など）が設定されている。これらの目標は行動目標のように具体的ではないため、指導に当たる教師によって実際の学習場面の中で具体的なものに設定し直される。例えば、一学期間の学級の生活目標を定める学級活動の場面では、子どもたちが自分たちの日常生活における課題に気づき、話し合いを通してそれを学級目標として設定することができているか、などの点が具体的な評価目標として設定される。学問的な系統性をもつ各教科に比べ、特別活動の学習では、子どもの日常生活のあり方自体が学習対象となる。ここでは、子どもたちが生活を積み重ね、変化していくことで学習が展開していく。教科の学習に比べて特別活動の場合に特徴的な点は、子どもの生活状況が大きく変化した場合に、それに応じて特別活動の学習内容が修正、変更されるということである。先に述べた例で、子どもたちが設定した学級目標について、その後の生活のあり方に応じてそれが設定し直されるというケースもある。特別活動では、一度設定された目標であっても、子どもの実態に応じて軌道修正、さらには目標自体の立て直しが行われることも多い。特別活動における学習内容は子どもの在り方に大きく依存し、時にはその学習目標にさえ修正が加えられる。このような構造をもつ特別活動での学習

は、状況依存度が高く再現性が低いものとなる。端的に述べれば、ある特定の学級で成功した指導方法が、状況の異なる他の学級では適切ではない場合も多い。このように、特別活動の学習では、それが子どもの体験を中心としたものであるがゆえに、同じアプローチで実施したとしてもその学習効果の再現性は乏しくなるといえる。

本研究では、特別活動の意義が明確でないことの要因として、特別活動における学習がもつ体験的な特性と、そこでの学習効果の再現性が低いことが課題であると捉える。

### 3. 教育プログラム概念の検討

#### 3. 1 日本における教育プログラム

現在、日本の学校教育においても教育プログラムを活用する実践事例が増えてきている。日本で教育プログラムが注目されるようになった主な契機に、いじめ防止プログラムがある。これは、1990年代の日本の学校でのいじめ対策として紹介されたものである。代表的なものは、ノルウェーのオルウェーズ (Olweus) やイギリス教育省が開発したプログラムである<sup>2)</sup>。これらの試みは日本に広く紹介され、こうしたプログラムを実施していじめ対策を行う学校の事例も多く報告された<sup>3)</sup>。いじめ問題の対策として学校外の教育プログラムが導入されるようになったのち、いじめ以外の様々な問題に対する教育プログラムにも関心が払われるようになった。例えば、暴力防止、誘拐や虐待などの子どもの安全問題、人間関係の築き方や維持の方法、薬物使用防止などの健康問題、さらには経済や職業意識の形成 (キャリア教育) に関する教育プログラムが開発され、実施されるようになってきている。下の表1は、現在の日本の学校で実施されている教育プログラムの例である。

表1のように、現在日本で実施されている

教育プログラムが扱っているテーマは、子どもが実生活の中で直面している体験的な問題である。そして、教育プログラムが提供する学習内容も、ロールプレイやシミュレーション等を積極的に活用した高度に体験的なものである。この点においては、教育プログラムの学習は、特別活動での学習と重なる部分が多い。しかし、教育プログラムは、その学習の再現性を担保することで一定の評価を得ている。例えば、表1にあるCAPプログラムやセカンドステッププログラムは、その暴力防止の効果が認められ、現在いくつかの地方教育委員会によって採用され、実施されている。

体験的であるがゆえに、その学習効果の再現性が乏しくなってしまうのが特別活動の課題であった。これに対して、教育プログラムは高度に体験的な学習を提供しつつも、その学習効果の再現性は担保しているといえる。果たしてこの違いはどこにあるのだろうか。以下、教育プログラム概念の検討を通して、この点について指摘する。

#### 3. 2 教育プログラム概念の検討

プログラム (program) は、その語源をたどると「公示」、「議案書」(written public notice, 17C 初) や「明確な計画」(a definite plan or scheme, 19C 初) の意をもつとされる<sup>11)</sup>。もともとは、「公共性」や「計画性」がその含意であった。現在では、主にコンピューターのプログラミング (動作指示の書き込み)、演奏会のプログラム (表記された演目、演目が記載された冊子) や、テレビのプログラム (番組表) 等のように使用されている。また、教育の文脈では学習のコース (a course of study) を意味する場合もある<sup>12)</sup>。つまり、プログラムとは計画 (plan) である。

教育プログラムは、「特定の教育目標をもち、その達成に必要なである明確な学習プロセスによって構成される教育資源のまとまりで

表1 日本国内で実施されている主な教育プログラム

教育プログラム	概要
CAP (Child Assault Prevention) プログラム	人権概念の学習を通して子どもたちがいじめ、痴漢、誘拐、虐待や性暴力といったさまざまな暴力に対して何ができるかを、子ども、親、教職員、地域の人々に教える子どもへの暴力防止プログラム。米国のNPO 団体であるCAP によって開発・実施されている <sup>4)</sup> 。
セカンドステップ (Second Step) プログラム	子どもに対して「共感 (相互の理解)」「問題の解決」「怒りの扱い」の学習を中心として、子どもに人間関係の基本的なスキルを身につけさせる教育プログラム。米国のNPO 団体であるCommittee for Children によって開発・実施されている <sup>5)</sup> 。
VFL (Voices of Love and Freedom) プログラム	米国ハーバード大学のセルマン氏 (Selman, R.L.) によって開発された、「相手の気持ちを推測し、理解する能力」である「役割取得能力」の育成を目的とする「総合的な人格形成プログラム」である。日本の学校教育において、「道徳の時間」や「総合的な学習の時間」においてこのプログラムを活用した実践報告がなされている <sup>6)</sup> 。
ライフスキル教育プログラム	「我々がより良く生きていくために不可欠な基本的心理社会能力 (ライフスキル)」の形成に焦点を当てた健康教育プログラム <sup>7)</sup> 。
性・エイズ教育プログラム	ライフスキル教育の考え方を基盤として、学校での「総合的な学習の時間」の中での実施を目指して開発・実施されている、「望まない妊娠・中絶や性感染症やHIV の感染を防ぐ」ことを目的とした教育プログラム <sup>8)</sup> 。
東京都品川区教育委員会「スチューデント・シティ」	学校の中に「街」を再現して、そこでの体験を通して子どもたちが (小学4～5年生) が社会と自分の関わり、経済の仕組み、仕事やお金とは何かを学び、「社会的適応力」を身につけることを狙いとした教育プログラム <sup>9)</sup> 。
キャリア教育プログラム	小中高生を対象として、実際の社会人とともにコミュニケーションゲーム等の様々な活動を通して、将来について考えるきっかけを提供する教育プログラム。日本のNPO 法人キーパーソン21によって開発、実施されている <sup>10)</sup> 。

あり、学習目的、対象とする学習者、学習内容 (学習形態、学習方法、学習環境、教材・資料)、学習期間が明確に定められているもの」と理解されている<sup>13)</sup>。

いっぽうで、カリキュラムは学習者の学校教育における「学習経験の総体」として捉えられる。カリキュラム概念は、学習者が実際に経験している多層的な内容を包括する。したがって、学習のプロセスで生じる、教師が意図しなかった結果をもその射程に収めている。これは隠れた (潜在的) カリキュラムと

呼ばれるものである。さらに、教師が意図的に行う教授実践はもちろん、無意図的に行う教授実践の部分も含んでいる。このように、カリキュラムは教授—学習のプロセスを幅広く捉える概念である。以下の図1にカリキュラム概念を示す。

教育プログラム概念は、学習目的、対象とする学習者、学習の手続き、そして学習期間が明確に定められた「完結した学習の単位」である。このように、その実施条件を明確に限定することによって、教育プログラムはそ

教育プログラム				
① 計画されたカリキュラム				
例) 法規 学習指導要領 時間割 教科書	意図された計画内容	“想定内”		○
② 実践されたカリキュラム	}	意図された実践内容	“想定内” ②-1	○
例) 授業案 実際の指導内容 学習環境 教師と生徒のコミュニケーション		意図されない実践内容	“想定外” ②-2	
③ 経験されたカリキュラム	}	意図された学習経験	“想定内” ③-1	○
例) 知識 技能 習慣 価値観 思考スタイル		意図されない学習内容	“想定外” ③-2	

図 1 カリキュラムの多層性

の成果を保証することができる。つまり、学習成果の再現性を保証する。これに対し、カリキュラム概念は、学習者が実際に経験している多層的な内容に注目している。このため、カリキュラム概念には、再現性が乏しい「意図されない実践内容」や「意図されない学習内容」が含まれる。この部分は、学習における意図されない、いわゆる不確実な部分である。教育プログラム概念は、この部分を含まない。学習における不確実性を可能な限り排除する、完結した学習概念である教育プログラムに対し、カリキュラムは学習における不確実性をその射程に含む、開かれた学習概念である。これらの特徴をふまえると、上記の図 1 の中で教育プログラムに該当する部分は、①の意図された計画内容、②-1の意図された実践内容、そして③-1の意図された学習経験のみとなる。

### 3. 3 体験的な学習と学習効果の再現性を両立する教育プログラムの仕組み

ここまで見てきたように、教育プログラムは、その学習における不確実性を可能な限り排除する概念である。しかし、現在日本で実

施されている教育プログラムの多くは高度に体験的な学習内容を提供している。それでは、なぜ、教育プログラムにおいては体験的な学習内容と、その学習効果の再現性が両立可能となっているのだろうか。ここではプログラム評価研究の分野において、教育プログラムを評価する際に設定される3つの視点を手かりにしてこの点について検討する。

#### 3. 3. 1 ニーズ分析 (Needs Assessment)<sup>14)</sup>

一般的にニーズとは、必要、欲求、要求として理解されている。教育プログラムにおいては、その教育目標と対象とする学習者を設定する際に行われる手続きがニーズ分析である。教育におけるニーズとは、「教育的に望ましいと考えられている状態に対する、学習者の現状とのギャップ」であると考えられることができる。例えば、中学校3年生終了時点までに習得することが望ましいとされている英単語数を想定してみる。これに対して、中学校3年生を終了しようとしている子どもが現時点で習得している英単語数とのギャップ(差)が英単語学習のニーズとして把握され

る。

多くの教育プログラムは、特定の問題に特化した学習内容を提供する。ニーズ分析を行うことで、教育プログラムの学習内容を必要とする（ニーズがある）対象者を学習者として設定することが可能になる。例えば、子どもへの暴力防止プログラムであるCAPに対して、誘拐事件が発生した地域や治安が不安定な地域の学校は高いニーズを有している。こうした地域でCAPプログラムを実施した場合には、他の比較的安全な地域よりもプログラムに対する満足度や評価が高くなることが見込まれる。

このように、教育プログラムを実施する際には、ニーズ分析を十分に行うことがプログラムに対する学習者の満足度や評価を担保することにつながる。このことは、教育プログラムの学習効果の再現性を保証する仕組みの一つになっている。

### 3. 3. 2 アウトプット（結果、Output）

／アウトカム（効果、Outcome）

／インパクト（影響、Impact）<sup>15)</sup>

プログラム評価では、教育プログラムを実施したことによって生じる結果は、大きく3つに分けて捉えられる。すなわち、プログラムの実施によって産出されるモノや状況であるアウトプット、プログラムによって生じた学習者への効果であるアウトカム、そしてプログラム実施後に一定の時期を経て副次的に現れる影響であるインパクトである。

CAPプログラムの例でいえば、アウトプットには参加した子どもの人数、受講時間などが含まれる。アウトカムには子どもの意識の変化、習得した知識やスキルなどが含まれる。そして、インパクトにはCAP実施後に子どもの保護者たちの防犯意識が高まったことや、そのさらに後に地域の治安が安定したことなどが含まれる。

教育プログラムの効果を多角的に捉えるこ

の視点によって、学校で実施される教育プログラム自体の効果（アウトカム）だけでなく、それが学校のカリキュラムに与える影響（インパクト）までを把握することができる。

### 3. 3. 3 プログラムの完全性（Program Integrity）

プログラムの完全性とは、プログラムの効果を保証するための視点である。これは、プログラム自体が依って立つ理論や内容を、プログラムを実施するスタッフが十分に理解しているかどうかを確認する概念である<sup>16)</sup>。この概念は、家族介入を伴う青少年の矯正教育プログラムの効果を十分に引き出す要因を探る中で特定されたものである。調査に当たったアンドリューズらによると、4つ以上のプログラムの完全性の項目を組み込んだプログラムは、3つ以下のものよりも有意に高い効果を示した<sup>17)</sup>。この概念を学校で教育プログラムを実施する際に教師が関与すべき項目に読み替えることで、プログラムの内容を正確に実施することを保証する視点となる。以下の表2に、その6項目を挙げる。

学校で教育プログラムを実施する場合には、この6項目は、教師が“プログラムの内容と学習プロセスの理解、実施への十分な関与、実施プロセスの第三者評価、カリキュラムとの接続、印刷された教材の用意、子どもの変化の確認”を行っているかをチェックする項目となる。これらの項目が確認されれば、教育プログラムは一定の条件のもとで実施されていることとなる。すなわち、学習効果の再現性がある程度は保証されることになる。

ここまで、高度に体験的な学習内容を提供している教育プログラムがその学習効果の再現性を担保している、主な3つの仕組みについて論じてきた。本研究では、この仕組みを特別活動における個々の学習活動に適用することが、特別活動カリキュラム全体の学習効果の再現性を高めることにつながると考え

表 2 プログラムの完全性

	【読み替え後】
①特定のモデル (Specific Model) を有するか	・・・プログラムは明確な学習モデルに依っているか
②訓練された実施者 (Trained Workers) が関与しているか	・・・教師がプログラム実施に必要なスキルを習得しているか
③臨床のスーパービジョン (Clinical Supervision) がなされているか	・・・プログラム実施中に他の教師によるチェックが行われているか
④訓練されたスーパーバイザー (Trained Supervisor) が関与しているか	・・・プログラム内容を熟知している教師が監督者として関与しているか
⑤プログラムの印刷物 (Printed Program Materials)	・・・プログラムの目標と内容が明記された印刷教材があるか
⑥過程や変化のモニタリング (Monitoring Process/Change)	・・・プログラム実施中に教師が子どもの変化を確認しているか

る。次節では、どのように個々の学習活動にこの仕組みを適用することができるか、提案する。

#### 4. 教育プログラムの総体としての特別活動カリキュラム

周知のように、特別活動は学級活動、児童・生徒会活動、学校行事、そしてクラブ活動（小学校のみ）によって構成されている。表3は、学校行事で実施される活動例を挙げたものである。学校行事を例に見ても、特別活動は様々な個別の活動によって構成されていることがわかる。

特別活動の意義を明確なものにするためには、特別活動の学習活動の成果を、ある程度再現性のあるものにする必要があることを述べた。そして、特別活動同様に高度に体験的な学習内容を提供しつつも、学習効果の再現性を一定程度確保している教育プログラムに注目し、その仕組みを検討してきた。その具体的な仕組みとして、ニーズ分析、アウトプット／アウトカム／インパクトという学習効果の評価視点、そしてプログラムの完全性という3点が挙げられた。

本節では、これまでの検討をふまえ、特別活動を構成する個々の学習活動を、それぞれが完結した学習の単位である教育プログラム

として捉える。そして、それぞれの教育プログラムを実施する際に、この3点に留意すること。そうすることで、これら教育プログラムの総体である特別活動カリキュラムにおける学習効果の再現性が一定程度保証されるようになるのではないかと考える。ここでは、このプロセスについて試論的に明らかにしていく。

##### 4. 1 特別活動におけるニーズ分析

特別活動におけるニーズ分析は、どのようなものになるだろうか。ここで最も重要な点は、用意される教育プログラムでの学習内容に照らし合わせて、対象となる子どもの現状を把握すること。そして、子どもの現状とプログラムの内容との間にあるギャップを明らかにすることである。ニーズは、知識、技能、意欲、意識、態度または経験や習慣などの様々な形で現れる。さらに、子ども自身が自覚していないニーズも多く存在する。このため、ニーズ分析を行う際には、子どもの実態を多角的に捉えることが必要である。

清掃活動を例に挙げれば、教師はまず、子どもの清掃に関する知識や技能（用具の使い方、清掃の仕方など）、意欲や意識（自発的に清掃に取り組めるか、清掃の意義を理解しているかなど）について、さらには態度、経験や習慣（清掃活動に対する考え、清掃をす

表3 学校種別ごとの学校行事内容例

	小学校	中学校	高等学校
儀式的行事	入学式卒業式始業式終業式終了式開校記念の儀式着任式離任式朝会	入学式卒業式始業式終業式終了式立志式開校記念の儀式新任式離任式	入学式卒業式開校記念日の儀式始業式終業式（その他対面式や朝会等も含む）
文化的行事	学芸会学習発表会作品展 示会音楽会読書感想発表会 クラブ発表会音楽鑑賞会演劇 鑑賞会地域伝統文化等鑑賞 会	文化祭（学芸会）学習発表 会音楽会（合唱祭）作品発 表会（展覧会）音楽鑑賞会 映画／演劇鑑賞会伝統芸能 等鑑賞会講演会	文化祭（学校祭）音楽会（合 唱祭）弁論大会各種発表会 （展覧会）音楽鑑賞会映画 ／演劇鑑賞会伝統芸能等鑑 賞会講演会
健康安全・体育的行事	健康診断や給食に関する行 事避難訓練／交通安全防犯 等安全に関する行事運動会 ／球技大会	健康診断薬物乱用防止指導 防犯指導交通安全指導避難 ／防災訓練 健康／安全や 給食に関する行事運動会 （体育祭）競技会球技会	健康診断疾病予防交通安全 を含む安全指導 薬物乱用 防止指導避難／防災訓練健 康／安全に関する行事体育 祭（運動会）各種球技大会 ／競技会
旅行・集団宿泊の行事	遠足修学旅行野外活動集団 宿泊活動	遠足修学旅行移動教室集団 宿泊野外活動	遠足修学旅行移動教室集団 宿泊野外活動
勤労生産・奉仕の行事	飼育栽培活動校内美化活動 地域社会／公共施設等の清 掃活動福祉施設と交流	職場体験各種生産活動上級 学校や職場の訪問／見学全 校美化地域社会への協力学 校内外のボランティア活動	就業体験（インターンシッ プ）各種生産活動上級学校 や職場の訪問／見学全校美 化地域社会への協力学校内 外のボランティア活動

\* 小学校における勤労生産・奉仕の行事については、総合的な学習の時間でボランティア活動や栽培活動を行うことによって代替することが可能

\* この表は2008、09年度版学習指導要領をもとに筆者が作成

る習慣や経験など)について現状を把握する。そして、清掃活動というプログラムの目標と子どもの現状との間にあるギャップを明らかにする。こうすることで、清掃活動というプログラムが提供することができるニーズについての見通しを立てることができる。

#### 4. 2 特別活動における学習効果の評価

ここで重要となるのは、個々の教育プログラムはその実施過程で、様々な結果（アウトプット）を生み出すということである。プログラムの効果（アウトカム）は、プログラムが終了した後に確認されるものである。そして、複数のプログラムの効果が積み重なったものとして、特別活動の学習効果（インパクト）を形成するという枠組みである。この枠組みで特別活動カリキュラム全体を表したモデルが図2である。

特別活動カリキュラムの学習効果は、学級

活動、クラブ活動や部活動、そして修学旅行などそれぞれの教育プログラムを実施した後、に即時的に現れるものではない。特別活動においては、複数の教育プログラムが同時進行で実施されている。特別活動の学習効果は、これら全ての教育プログラムのアウトカムが最終的に集約された結果として、はじめて把握できるものである。

#### 4. 3 特別活動におけるプログラムの完全性

特別活動の中で行われる活動を、それぞれが独自に完結した学習の単位として捉えるためには、プログラムの完全性に関する項目（6点）に照らし合わせてチェックする必要がある。重視されるのは、主に以下の5点である。学校教育の場面では、これらの点を概ねおさえておくことができればよいと考える方が現実的であろう。

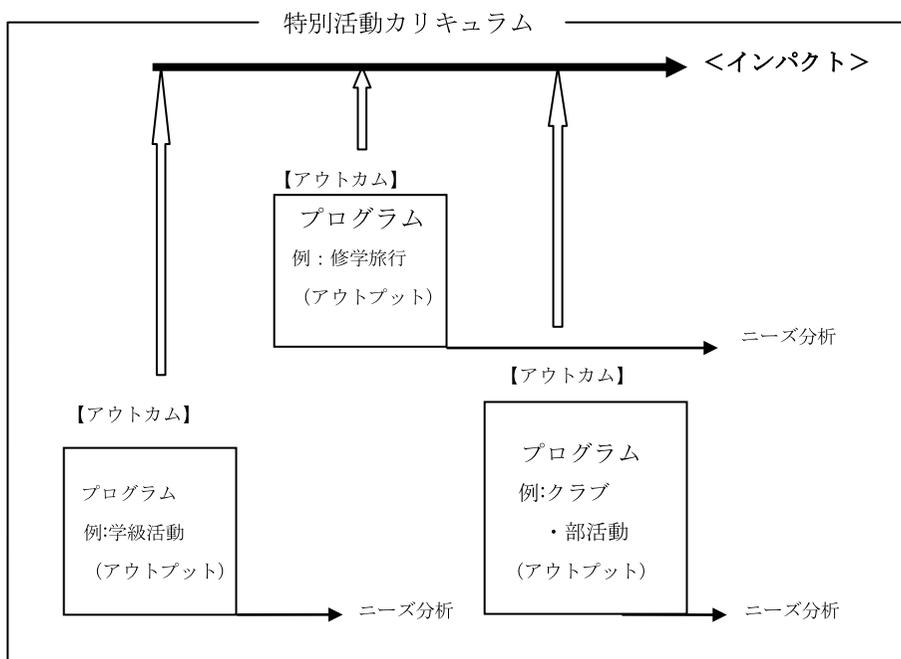


図2 教育プログラムの総体として捉えた特別活動カリキュラムのモデル

- ①教育プログラムとして明確な学習手続きが定められているか。
- ②教師は、教育プログラム実施に必要な知識と指導スキルを備えているか。
- ③教育プログラム実施の際に、第三者によるチェックが行われているか。
- ④教育プログラムの目標と内容が明記された印刷教材があるか。(教師と子どもが、客観的な資料としてプログラムの目標と内容について理解するため)
- ⑤教師は、教育プログラム実施のプロセスで生じる子どもの変化を把握しているか。

例えば、職場体験においても上記の5点にもとづいて学習活動を構成することは可能である。①、②に関しては、教師と訪問先の担当者との間で役割を明確に分担する。③、⑤に関しては、複数の教師がチェックを行い、データとして子どもの変化を記録する。このように、上記の5点に関してそれぞれの活動の特性に応じて工夫をすることで、教育プロ

グラムとしての構造を確かなものとすることができる。

## 5. まとめ

本研究では、特別活動の意義を見直すために、特別活動における個々の学習活動を教育プログラムとして捉え、それらの学習効果が再現性を確保するために必要な視点を検討してきた。具体的には、ニーズ分析、アウトプット/アウトカム/インパクト、そしてプログラムの完全性という3つの視点を通して特別活動カリキュラムを再構成することを提案した。本研究での提案は、理論的な検討によって導き出されたものである。したがって、この提案の実践レベルでの適切さについて実証していかねばならない。さらに、ここでは特別活動カリキュラムに焦点化して論を進めてきた。このために、各教科のカリキュラム編成に対して、教育プログラムの視点がどれほ

ど有益な示唆を生むかという点に関しても、今後検証していく必要がある。そうすることで、学校カリキュラム全体を、よりいっそう子どもの実態に応じた効果あるものにすることに貢献していきたい。

#### 注

- 1) 例えば、日本特別活動学会では、2011年8月に「知識基盤社会における特別活動の意義と課題」をテーマに創立20周年記念シンポジウムを行っている。ここでの議論の焦点の一つは、知識基盤社会の中で、特別活動の意義をどのように打ち出していくか、という点であった。
- 2) Olweus D. *Bullying at School: What We Know and What We Can Do*. Oxford, Blackwell Publishers, 1993、『いじめ こうすれば防げるノルウェーにおける成功例』ダン・オルウェーズ川島書店 1995、『いじめ、ひとりで苦しまないで－学校のためのいじめ防止マニュアル－イギリス教育省の試み』イギリス教育省（Department for Education, United kingdom）東信堂 1996
- 3) 新潟県では、県をあげたいじめプログラムを2000（平成12）年に開発、実施している（新潟県ホームページ <http://www.pref.niigata.lg.jp/gimukyoiku/1192033847756.html> 2011年10月取得）。
- 4) NPO 法人 CAP <http://www.cap-j.net/>
- 5) NPO 法人日本子どものための委員会 <http://www.cfc-j.org/>
- 6) 渡辺弥生編集『VFLによる思いやり育成プログラム』図書文化社 2001、渡辺弥生「社会的スキルおよび共感性を育む体験的道德教育プログラム－VLF（Voice of Love and Freedom）プログラムの活用－」『法政大学文学部紀要』第50巻 2005 pp.87-104.
- 7) JKYB 研究会 <http://www5c.biglobe.ne.jp/~jkyb/>
- 8) 皆川興栄編著『総合的学習：性・エイズ教育プログラム』亀田ブックサービス 2000
- 9) 品川区教育委員会 <http://www2.city.shinagawa.tokyo.jp/jigyo/06/sidouka/p23.html>  
公益社団法人ジュニア・アチーブメント日本 [http://www.ja-japan.org/program/student\\_city.html](http://www.ja-japan.org/program/student_city.html)
- 10) NPO 法人キーパーソン21は、小中学校にキャリア教育プログラムを提供する活動を行っている。（<http://www.keyperson21.org/> 2011年10月取得）。
- 11) “program” in *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, Oxford University Press, 2005
- 12) “programme” in *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Oxford University Press, 2000
- 13) *Handbook of Practical Program Evaluation second edition* 2004 Joseph S. Wholey, Harray P. Hatry and Kathryn E. Newcomer, Jossey-Bass pp.7-8., A Program Evaluation Primer, Simon Priest, *The Journal of Experiential Education*, Spring 2001 Volume 24 no.1 pp.34-40, *Program Evaluation* third edition, 2004 Jody L. Fitzpatrick, James R. Sanders and Blaine R. Worthen, Pearson Education, p54などを参照
- 14) 安田節之、渡辺真澄 2008『プログラム評価研究の方法』新曜社 pp.21-33. 及び、マイケル・スミス著藤江昌嗣監訳矢代隆嗣訳 2009『プログラム評価入門』梓出版社 pp.51-58.
- 15) 安田、渡辺前掲書 pp101-112.
- 16) 宮古紀宏 2010「効果的な矯正教育の原則に関する一考察－教育実践におけるエビデンスの探求－」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第2号、pp.93-105.
- 17) Dowden, C. and Andrews, D.A. 2008 *Effective Family Interventions for Youth Offenders: Some Important Considerations*, In Roberts, A.R.(ed) 2008 *Correctional Counseling and Treatment: Evidence-Based Perspectives*, Pearson Hall, pp.59-74.